

朝をひらく

初雪は一夜にして景色を一変させる。因習の殻に閉じこもった人の頭も、一晩で変わる事ができれば、さぞ心も軽くなるだろうに。不可能なことなのだろうか。

英国の文豪、チャールズ・ディケンズは小説でこの不可能に挑んだ。今から170年前に書かれた「クリスマス・キャロル」である。

主人公はケチで守銭奴のスクルージ。彼の頭の中はお金のことだけ。さて今日はクリスマスイブ、7年前に過労死した同僚マーレイの命日でもある。しかしスクルージは、ただただ金も

癡り固まった癖

永田 円了
真国寺住職



うけにあげられる。

「叔父さん、クリスマスは年に一度だけ、このときぐらいは仕事を中断し、自分以外の人のことを思ってあげるときですよ」という甥を、「くだらん！」と追い返す。

疲れて帰宅したスクルージを、3人の亡霊が訪れる。3番目の亡霊は彼を未来へと導く。草むしり荒れ果てた墓場で、見捨てられた墓碑に刻まれた自らの名を読んだとき、彼は

ハッと気づく。この悪夢のような未来は、まだ変えることができるのか。日々の生き方がその人の結末を決める。だがその生き方を変えれば、結果も変わるはず。

瞬時に目覚めたスクルージ、人情のかけらもない守銭奴だった自分に気づき、クリスマスを境に感謝と慈悲にあふれた人間として生き始めるという物語である。

私事ながら、息子が小学校5年生の時のこと、ちょうど将棋を覚え始めた頃だった。夜、次の日の講演会の準備でコンピュータにむかっていた私に、息子が将棋をしようとせがんだ。「いま明日のための大切な仕事の最中でだめだ！」という私

に彼は、「ふくん、明日は何の話をするの？」と聞いた。「人間関係の大切さについてだ」と答えると彼は少し間をおいて言った。

「お父さん、親子の人間関係も大事なんじゃないがけ！」

私の頭は何か金づちでガツンと打たれたような衝撃を受けた。「お前は自分の家族の人間関係をほったらかしにして、何を語ろうというのか！」。息子の痛烈なメッセージは、私の23年間の教員生活を根底から問うものであった。自分自身を棚にあげ、何かを証明したり理屈づけたりして、ただ解説者のごとく語ってきた自分を恥ずかしく思った。

長年にわたって癡り固まった人の癖も、心の中心が「声」を受け入れた瞬間に変わりうる。そんなクリスマスになればいい。

亡霊と息子の金づち